

# 西洋の唐茄子

長谷川時雨

青空文庫



青葉の影を「柳の虫」の呼び声が、細く長く、いきな節に流れてゆく。

——孫太郎むしや、赤蛙……

ゆつくりとした足どりで、影を踏むように、汚れのない黒の脚絆と草鞋が動く——小いさな引出しつきの木箱を肩から小腋にかけて、薄藍色の手拭を吉原かむりにしている。新道にはまだ片かけがあつて打水に地面がしつとりとしている。

——しもたやのくせに店をもっている家——そうではなかったのかも知れない——閑散な店なのだったのかも知れないが、あんぼんたんはその家の、二間の障子がすぐはまつている店口に腰をかけて、まばらに通る往來の人を眺めていた。その家は一間巾位の中庭があつたので、天窓からのような光線が上から投げかけられ、そこに植った植木だけが青々と光っていて、かえつて店の中の方が薄っ暗かった。天井から番傘がつるしてあるだけ覚えていて。眉毛をとつた中年増の女房さんと、その妹だという女と、妹の方の子らしい、青い瘦せた小さな男の子とがいた。

学校の行きかえりにその家の前を通ると、白い障子を細目にかけて外を覗いているものがあつたが、声をかけられたのはその近くだった。はじめは何処のお子さんと訊いたりし

て、姉妹で私の肩上げをつまんだり袂たもとの振りを揃えて見たりしていたが、段々に馴染なじんで先方むこうでも大つぴらに表の障子を明け開ひらけて、店口に座って私の帰りを待っていてくれるようになった。山吹きの枝のシンを巧く長くだしてくれて、根がけにしてくれたのもその人たちだった。

鼠ねずみとり薬を売る「石見銀山いわみ」は日中か夕方に通った。蝙蝠こうもりが飛び出して、あっちこちで長い竹ものほしぎょ棹おを持ちだして騒たそがれぐ黄昏たそがれどきに、とぼとぼと、汚れた白木綿に鼠の描いてある長い旗を担かついで、白い脚絆ひなか、菅笠すげがさをかぶってゆく老人の姿は妙に陰気くさくいやだった。日中ひなかでも、

——いたずらものはいないかな……

という声をきくと、鼠でなくても、子供でも首をひっこめた。

この家の女姉妹は、なんとなく女子供がいじって見たかったと見えて、私の髪を結ばせてくれといった。宅うちではあんまりよろこばなかったが、彼女たちは私の短かい毛をひっぱって、練ねりあぶら油と色元結でくくりつけるのを悦よろこんだ——あたしは店さきに腰をかけて、足をブランブランさせたり、片っぱ飛ひばした下駄よこを足さぐりしたりして、首だけ凝じっと据すえている。

青葉がもめて、風がすつと通つてゆき、うすい埃ほこりがたつと、しんとした正午近くは、「稗ひえま蒔まき」が来る。苗売りが来る、金魚やがくる、風鈴やが来る。ほおずき売りが来る。

汗ばんで来たなと思うころには、カタカタと音をさせて、定齋屋じよさいやがくる、甘酒売りがくる。虫売りがくる——定齋屋と甘酒やだけが真夏になればなるほど日中炎天をお練りでゆくが、その他は小かげをえらんで荷をおろす。丁度その家の隣りが堀越角次郎という、唐物問屋うぶつどんやの荷蔵の裏になつて、ずっと高い蔵つづきの日かげなので、稗蒔屋ひえまはのどかになたまめ煙管キセルをくわえ、風鈴屋はチロリン、チロリンと微風そよかぜに客をよばせている。そんな時あたしのおたばこぼんが出来上ると、中に赤や青や金色の小さな瓢箪ひょうたんか、役者の写真の浮いている水玉のかんざしを、その姉妹が買ってさしてくれたり、腰にギヤマンの瓢箪をさげさせたりした。私のために大きな稗蒔ひえまきの鉢をかって、柴橋しばしをかけさせたり、白鷺しらさぎをおかせたり釣師の人形を水ぎわにおくために金魚も入れたり、白帆船をうかせたりしてくれた。

けれどあんぽんたんには親しめない家だった。店口より上へ、あがった事がなかったの  
で、いつの間にか私の妹の、人なつこいお丸ちゃんが、代りに抱いたり、かかえられたり  
するようになった。

その家の右隣りの古板塀が、村上という漢方医者だった。その隣りが滝床——滝床といつても理髪店ではない。小さな酒屋だ。店の向つて右手に、石で袖をした中に大きな水桶があつて、貧乏徳久利が洗つてあり、正面に盛切りの台が拭きこんであつて、真白な塩がパイスケに山盛りになつて、二ツ三ツの酒樽と横に角樽が飾つてある店だ。赤ら顔の頭の禿げた滝床は、大通りの大店をもっている廻り髪結さんだったのだ。だから酒屋さんの店にいるときはすけない。たまに店にいる時は、ずっと店の前の方へ腰かけをもちだして、お客に白いきれをかけて斬髪をしてその道具が、菊五郎のおはこの『梅雨つゆこそ小袖昔八丈』の髪結新三しんざが持つてくるのとそっくりそのままをつかっている。滝床親方は、ずんぐりした体にめくらじまのやや裾みじかな着附きつけでニコニコ洋鋏はさみをつかっていたが、お得意なのは土鉢に植えた青い、赤い実のなつているトマトだった。尤もトマトなんて、知っているものもすけなければ、食することなどはなおさらだったであろうが、細竹でささえて、二尺五寸ばかりに伸びたそれは、葉が茂つて赤い実が美しく、斬髪の客の傍におかれてあつた。

「この実のなつてるのなんだね？」

「西洋の唐茄子だということ——」

「へえ？ 珍しいものだが、西洋の唐茄子って、ばかに細こつかいもんだな。」

その一軒おいてとなりに紙屑屋かみくずやのおもんちゃんの家うちがあった。おもんちゃんの家は表はせまくつて、紙屑で一ぱいだったが——紙屑やといつても問屋だったのだ——裏には空地があつて、糸瓜へちまの棚が田舎めかしかつた。その後空瓶の小屋があつた。空地では子供角力が夏になると催ひらうされた。

おもんちゃんは疝かんの高い子だったので、みんなから狂きちがい気あつかいにされて、ある日大門通りの四ツ角で、いたずら子供たちにとりまかれ、肌ぬぎになつて折れた鉄物かなものを振つて悪童を追いかけていた。花井お梅の刃にんじょう傷きずの評判が高かつたので「花井お梅、花井お梅」と、はやしたてられていた。

その隣家となりが小川湯、そうして三、四軒おいておあぐさんの家であつた。その向い側で面白い家をあげれば、角が土蔵から煙筒の出ている※芋屋の横腹、金物問屋かねぼし金星の庭口、仕立屋井阪さん、その隣りも大丸の仕立屋さん、猫ばあさんのいた露路口、井阪さんが丁ち字よんまげ鬘あたまで、ここの親方はへツつという髪あたまの見本を見せておいてくれた鍛冶屋かじやさん——表に大きな船板の水槽があつて、丸子や琉りゅうきん金きんの美事なのが沢山飼養されていた。鍛冶屋の店さきには、よくこうした水箱があつたがあれはなんのためだろうか、刀鍛冶などの流

れの末とでもいうしるしなのかどうか。その隣りが芝居や、講談などにある、芝日影町の古着屋で、嫁入着物に糊のりづ附けものを売ったため、嫁御寮よめごりようの変死から、その母親が怨みの呪のろい「め」と書いては焼火箸やけひしをつきさしていたという、怪談ばなしの本家江島屋の、後家になった娘のすんでいた格子戸づくり、それからどこかの荷蔵があつて、丁度滝床の向うが、吾平さんという馬具屋であつた。

吾平さんは顔の大きな、鼻も大きな、眼のちいさい人で、たつぷりした白髪をなでつけ、大きな鼈べつこう甲ぶちの眼鏡めがねを鼻の上のせて、紫に葵あおいを白くぬいた和鞍わくらや、朱房しゅぶさの馬連ばれんやそめかわ染革てつこうの手甲などをいじっていた。鞭むちとか、馬びしゃくとかいったものは一かたまりずつになつて沢山上から釣してあつた。漸ようやく一間半位の間口だったが、賑やかな見あきない店で職人もせわしく働いていた。前を通るとニカワを煮る匂いがした。

村上という医者の家が一番変つていた。どんな時、誰がどんな病気でも、あんぼんたんが薬をもらつてくる時、変だなあとおもうのは、練薬と膏薬こうやくの二種ふたいろだけだった。練薬は曲物まげものに入れ、膏薬は貝殻かいがらに入れて渡した。

敷石を二、三段上つて古板塀の板戸を明け一足はいると、真四角な、かなりの広さの地所へ隅の方に焼け蔵がひととまえ一戸前あるだけで、観音開きの蔵前を二、三段上ると、網戸かに白



紙が張つてある。くぐりをあけてはいると、ハイカラにいえば二階はあるが一間の家で、入口の横に薬の名を書いた白紙を張りつけた、引出しの沢山ある薬だんすがおいてあった。薄暗い中に、紋附きの羽織を着た、斬髪の伸びた村上先生がいた。御新さんは庭で——空地で、粗末な土べつ<sup>ど</sup>ついで御飯を焚<sup>た</sup>いている。その近所に、シヨボシヨボと竹が生えているばかり、大きい方の娘さんは盥<sup>たらひ</sup>で洗濯をしていた。入口の塀の近くに、さすが井戸だけはある。下の娘も黄色い顔で、外にもあんまり出なかつた。

このお医者さんは、外科はまるでだめだったと見えて、女中の足の指も腐らせてしまつたが、あんぼんたんの父の手の外傷<sup>きず</sup>も例の膏藥で破傷風<sup>はしやうふう</sup>にしてしまつた。がまん強い父が悪熱<sup>おねつ</sup>にふるえて、腕まで紫色に腫<sup>は</sup>れ上つてしまつても、彼は貝殻の膏藥を貼<sup>は</sup>りちらした。木魚のおじいさんが吃驚<sup>びつくり</sup>して、医の方で自分の先生のような木下さんという、旗本上りの顎髯<sup>あごひげ</sup>の長いお爺さんを連れて来て手術をした。妙なところへ東洋風の豪傑と江戸っ子の負け惜しみをもつ父は、かなりな大手術であつたであらうに、わざわざ病室から離れま<sup>き</sup>で出張して——枕も上らなかつたように思えたのに、八端<sup>はつたん</sup>のねんねこを引っかけて、曲<sup>ま</sup>よくろく

によりかかり、高脚<sup>コップ</sup>のお酒を飲みながら腕を裂かれていた。木魚のおじいさんが助手で、膿盤<sup>のうばん</sup>は幾個もとりかえられた。強い消毒薬のかぎは流れ

てきたが父の苦痛はすこしも洩れず、よく堪えている様子だった。私はハラハラした。障子の硝子の隅から細く覗いたが、父の姿は見えず、向うの欄間にかけてある、誰が描いた古画か、関羽が碁盤を見つめている唐画が眼に來た。父のこの大怪我もばからしい強がりから、爪でひつかかれたのだった。それも猫でも子供でもなく、父の部下のような若い代言人たちだった。鷗洲館とかいう、蔵前代地の、お船蔵近くの大きな貸席で、代言人の大会があつた時、意見があわないとて、父の立つ演壇へ大勢が飛上つて來て、真鍮の燭台で打ちかかるものや飛附いてくるものを、父は黒骨の扇——丁度他家からおくられた、熊谷直実の軍扇を摸したのだという、銀地に七ツ星だか月だかがついていたものだ——をもつていて身をふせいだのを、擊劍の方の手がきいているので鉄扇をもつているのかと思ひ、死もの狂いで噛みついていたりひつかいたのであつた。

騒ぎのあつた翌日、その狼藉者一党が揃つて詫びにきたが、その時、父はすこし寒気がするといつていたが、左の手の甲が紫色に腫れてるだけだった。相手の幾人かは頭に鉢巻したり、腕を結わえていたりした。そしていつた。

「ばかな真似をしてしまって、あれが刀だったら僕の頭は真二ツに割られているところだ。とても歩けはしないが、ぜひ詫びにゆけと皆に抱えてこられた。眼が廻るほどピンピンす

る。」

「一度診察させるのだ、何しろ鉄扇だから、どこか裂けるか、折れるかして思う。」

「ばか言え、鉄扇なんて、そんなおだやかでないものを持ってゆくものか、弁論の自由を尊重しながら、そんな野蛮な——でも、じゃないよ、見ろ、この扇だ。」

みんな変な顔をしていた。元気な父は村上さんに膏藥を貼らせながら一人の手を見ていった。

「や、その爪か！ 汚ねえのだなあ。」

相手の人も、鷹たかの爪のようにのびて、しかも真黒な爪垢あかがたまっている自分の五つの爪を眺めた。他の者たちも呆あきれた。だが、当然驚かなければならない医者が平然としていた。

父はお玉ヶ池の千葉について剣を学び、初期の自由党に参加した血の気が、まだおさまらなかつたのであろう。友達たちも自然荒武者だつた。その中に、親友であつて法律の先生である村田電造という人があつた。神田猿樂町さるがくちように住んでいた。黄八丈の着物に白ちりめんの帯をしめて、女の穿はく吾妻下駄あずまげたに似た畳附きの下駄へ、白なめしの太い鼻緒のすがつたのを穿はいていた。四角い顔の才槌頭さいづちあたまだつた。静かにお茶を飲んだり、御酒ののんだりはなしていた。

ある時、あんぽんたんが六才か七才だったろう、初夏に、このおじさんと父との真ん中に手をひかれて、鎧橋のたもとの吾妻亭という洋食やへいった。おさな心に残っているのは咬々たるらんぷと、杉の葉と、白い卓クロスだった。杉の葉は日本風の家を何か装飾したものであつたらう、ブランデーをかけて火を燃すオムレツも珍らしかつたが、私の眼に今も鮮かにくるのは赤いツブツブのある奇麗な小さな丸いものだった。たしか一つぶしかついていなかつたが、あたしが凝と眺めてみると、父が気がついて、自分の皿の中からとつて、あたしの白いお皿の、青いものの上にのせてくれた。すると、村田さんもおなじように、近眼鏡を近よせて、転がさないようにナイフの上に乗せてよこした。それがあたしの、苺のみはじめだったのだ。食べはしなかつたが、その赤さは充分に私を悦ばせ、最後までそのお皿をとりかえさせなかつた。

「おかしな奴だ、気にいったら見ているばかりで、他のものも食わなくなっちゃった。」父は帰ってからそういった。その癖がついて、洋食は大きくなるまで食べないで、手をつけないで、きらいではない習慣をもつた。

赤大根を知つたのもそれに似よつてゐる。十ばかりの時、クリスチャンの伯母夫婦——台湾のおじさん——が、神田南校の原の向う邸の中にいた時分、官員だったので洋室の食

堂をもつていて、泊りにゆくと洋食が出た。従弟いとこと私の妹おまっちゃんと三人で、赤大根を見た時、お皿の上で、葉をつまんで独楽こまのように廻した。黒い立派な大きな門をもつたこの邸の構内には、藤島さんという、伯父には長官にあたる造幣局のお役人のお宅があった。竹柏園ちくはくえん佐佐木信綱ささきのぶつな先生の夫人おくさまがそこのお嬢さんだった方だ。伯母の家の前、門のきわの竹の垣根に朝顔が咲いている家からはいい音がきこえていた、琴のこともあればヴィオリンの時もあった。幸田さんという、女でも偉い方で、一生懸命に勉強してお出なさるのだと、伯母はそのお家の前で鬼ごっこなんぞしていると叱つていった。あの有名な音楽家である幸田延子女史と、安藤幸子女史御姉妹のお若いころのことであった。

南校なんこうの原はらとは、大学南校のあった跡だと後に知った。草ぼうぼうとして、ある宵よい、小川町の五十稻荷ごとおいなりというのへ連れてつてもらった帰りに、原で人魂ひとたまというのを見た。

外国人の大きな曲馬団が来て、天幕を張り、夜になると太い薪まきを積みあげて炎をたてるのが、下町そだちの子供に、どんなにエキゾチックな興おもむき趣きを教えこんだであろう。私は曲馬を見るよりは、その天幕ばり全部を見るのを楽しんだ。父が来て、伯母の一家みんなと見物にゆこうとしても、私は外景を眺めているといつてみんなを困らせた。でも、原っぱのそこかしこに、馬が繋つないであったり、ある場所には象がいたり、かしこい犬がいたり、

人間にしても、美くしい白人少女もいれば、黒んぼもいる。その人たちが惜げもなく腕や肩を出して、焚火たきびのかがりの廻りにいたり、朝、原っぱを歩いていたりする景色は、とても楽しい生きた画であった。それにこの伯母の家にいると、牛うしが淵ふちへおたまじやくしを掬すくいにゆけたり、駿河台するがたいのニコライ会堂の建築場へもゆけるので、あきなかつた。御飯のときにみんなが十字をきるのも私の眼を丸くさせた。

# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 西洋の唐茄子

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>